

## 5. 太田森2号墳

### 1. 古墳の概要

福知山市夜久野町大油子、府道56号線（但東夜久野線）より向森橋を南に渡る牧川西岸の丘陵中腹に所在する。2号墳は円墳6基からなる太田森古墳群の南西側に位置し、昭和31年（1956）、夜久野史友会によって発掘調査がおこなわれた。『史の友』第1集で彼岸塚古墳として報告され（夜久野史友会1956）、調査成果については岡田大雄の報告に詳しい（本書Ⅱ部2章参照）。墳丘規模は不明で、主体部は右片袖式の横穴式石室と考えられる。石室全長は5.34m、玄室長3.12m、玄室幅1.55m、羨道長2.22m、羨道幅0.95mとされる。現在は顕著な石材や墳丘はみられず、消滅している可能性が高い。（守田）

### 2. 出土遺物の概要と出土位置

1956年におこなわれた太田森2号墳の発掘調査成果は『史の友』第1集に石室平面図や断面図、遺物配列図など計7枚の図が掲載されている。遺物については器種と点数が記述されており、土器は「祝部式土器＝蓋付盃二ヶ、杯七ヶ、高坏二ヶ／土器＝皿三ヶ破片多数 罎＝二ヶ」と見える（夜久野史友会1956）。その後1976年に発行された『京都 夜久野の文化財』には発掘時に撮影された石室内の写真が掲載されており、遺物の原位置がわかる貴重な手がかりとなった（写真1）。ここでは以上2つの資料を用いて遺物の原位置の復元を試みる。遺物の位置復元にあたっては、蓋然性が高いものから順にA～C（A：4点、B：2点、C：5点）の3ランクにわけた。

遺物には2種類のラベルが付されており、一方には「祝部式須恵器」「土師器」がみえることから、発掘調査後すぐにつけられたものと考えられる。

Aランクは『京都 夜久野の文化財』に掲載されている写真1と『史の友』実測図の記載（本書Ⅰ部2章：図9参照）から特定したものである。写真に写る鉄器からスケールを復元し、土器法量の手がかりとした。まず写真に見える杯蓋はつまみの形状から「祝部式須恵器1」（図1-11）であると推測され、これに組み合う土器は、同じく「祝部式須恵器1」のラベルを持つ（図1-13）であるとわかる。左隣の土器は地面に向かってすぼまる形状から「祝部式須恵器12」に比定でき（図1-12）、この状況は『史の友』「玄室の入り口近くにまり盃二個、銜、直刀…」の記述とも一致する<sup>(1)</sup>。

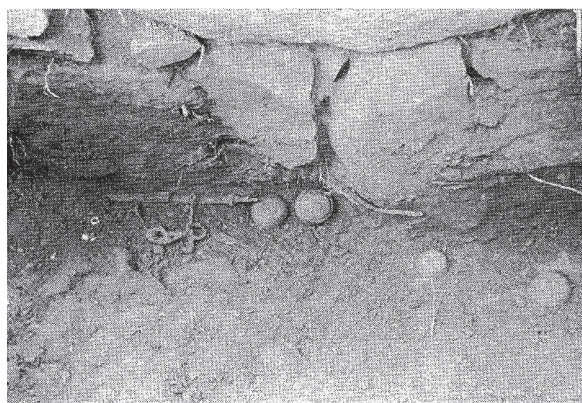


写真1 出土状況（夜久野町教育委員会 1981）

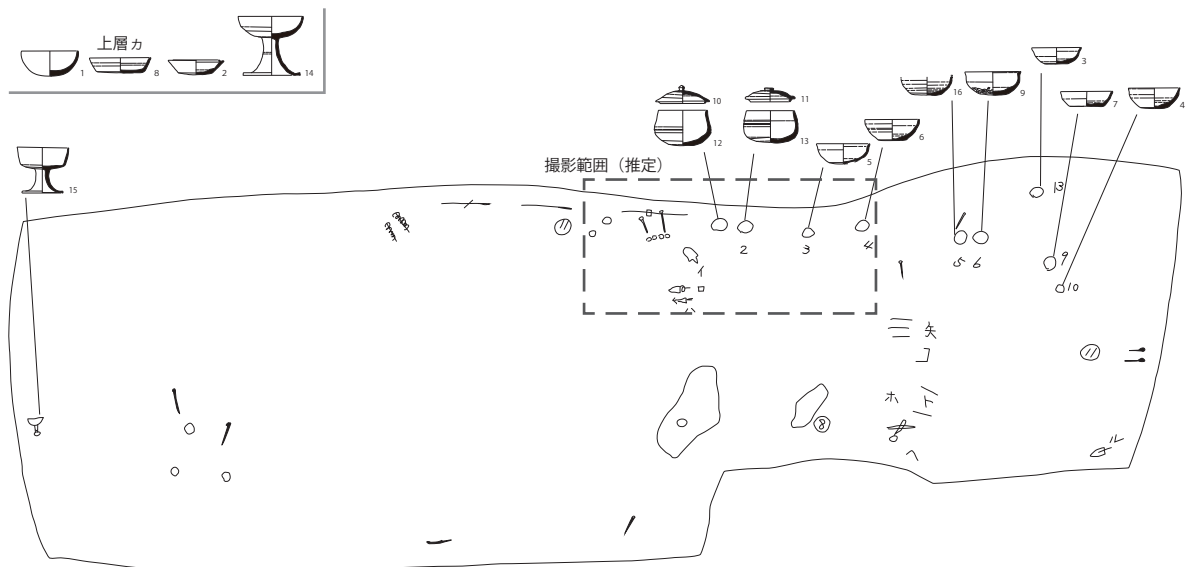


図1 太田森2号墳出土土器位置比定（夜久野史友会 1956 に加筆。縮尺不同。土器番号は表1・図2と対応）

表1 太田森2号墳出土土器対応一覧

番号	ランク	祝部シール	史の友1(1956)	『夜久野町市史資料編』(2006)
1		—	—	—
2		11	11(手前)	—
3	C	13・12	13	—
4	C	10	10	5
5	B	—	3	3
6	B	4	4	4
7	C	9	9	—
8		—	6	—
9	C	7	—	2
10		2	11(奥)	7
11	A	1	2	6
12	A	12	2	—
13	A	1	11(奥)	—
14	A	1	8カ	10
15		0	奥壁の記号	11
16	C	5	5	—

次に遺物配列図に書き込まれた奥

壁付近の高杯について考える。実際に出土した高杯は2点だが、配列図には1点のみ描かれている。調査時に1点だけ認識していたことを踏まえると、破損が少なく、出土時に高杯の形を留めていた「祝部0」（図1-15）と考えられる。以上4点がAランクである。

Bランクは写真から推測した。羨道側に位置する蓋杯を逆さにした個体は平底であることがわかる。底部

が平らになる個体は2点存在するが、口径と色調を踏まえると「祝部11」（図1-5）であると考えられる。また、写真右隣に位置する逆さの土器は底部にヘラケズリの痕跡を施すことがわかり、やや径が大きい土器であることと色調を勘案すると「祝部4」（図1-6）に比定できる。以上2点は信頼度が下がるためBランクとする。

Cランクは平面図と土器に記載された祝部番号が符合することを前提として比定したものである。『史の友』第1集には「先ず羨道から皿を数個発見、すべて二個づゝ対になって並べていた。」という記述がある（夜久野史友会1956）。このことから遺物配列図9・10に対応するものをそのまま「祝部9」（図1-7）・「祝部10」（図1-4）、13に対応するものを「祝部12・13」（図1-3）とする。図上に12という数字がみられないが、12・13が2つの大きな破片であることから遺物取上げ時は別個体と認識されていた可能性がある。次に遺物配列図5・6は「祝部5」（図1-

16)・「番号なし」(図1-9)に比定した。また、「祝部11」は図面上羨道部入口と撮影範囲付近に2か所確認できるが、記述から羨道部付近である可能性がある。以上の5点は形状が揃っており、「皿」という描写やセット関係にあるという記述とも一致する。

A~Cに当てはまるものを除くと図面上では羨道部・石室入り口近くの2か所に位置する⑩、羨道部の⑧が残った<sup>(2)</sup>。位置が特定できなかった5点の資料のうち、「祝部2」(図1-10)は椀蓋身が組み合っている状況から組み合う「祝部12」(図1-12)の近くに位置していた可能性が高い。ラベルがない(図1-1)に関しては全く手懸りをつかめなかった。また同じく番号がない(図1-7)については後述するように1点だけ年代が下るとみられること、「祝部」ラベルがないことから上層から出土した遺物の可能性がある。(小林 楓)

### 3. 出土土器

#### (1) 概要

『史の友』第1集および第7集に太田森2号墳出土土器についての記載があり、床面出土と考えられる下層出土土器として第1集では埴2、杯7、蓋付椀2、高杯2と、第7集では杯9、蓋付埴2、高杯2と記載されている(夜久野史友会1957)。『史の友』には実測図など土器の形状に関する情報はないものの、太田森2号墳として保管されてきた資料の多くには底部内面に共通するラベルが貼られている<sup>(3)</sup>。ラベルには「祝部式」あるいは「土師器」と記されており、太田森2号墳の発掘調査直後に貼られたラベルかは不明であるものの、『史の友』第1集において太田森2号墳出土土器が「祝部式土器」「土師器」として報告されていることと一致する。器種に混同があるものの『史の友』第7集に報告される須恵器の数量と現在太田森2号墳出土として保管されている須恵器の点数が基本的に一致することを考慮し、本稿では以上13(「蓋付椀」を身と蓋を分けて15)点の須恵器と、共通するラベルが貼られた土師器1点を太田森2号墳出土土器として報告する<sup>(4)</sup>(図2、写真4・5)。

土師器は椀が1点出土した。

1は丸底の椀である。内外面には丁寧なナデ調整が施されている。底部外面には若干の擦痕が観察される。

須恵器は杯が8点、無蓋椀が1点、有蓋椀が2組、高杯が2点、壺らしき貯蔵具の底部が1点出土した。

杯は口縁に受け部のあるもの(2)と受け部のないもの(3~8)に分けられる。2は口径9.7cmを測り、口縁部の形態が著しく退化しており、底部はヘラキリ不調整である。3~5は口縁部がやや外反する丸底傾向の杯で、3・4については底部ヘラキリ不調整であることを確認した。6・7は口縁部が直線的で、底部ヘラキリ不調整である。3~7は口径10.5~11.5cmにおさまるが7は器高が低めである。8は口径12.9cmを測る底部ヘラキリ不調整の杯で、他の杯に比べて口径が大きく器高が低い。

9は口縁が内湾する口径11.9cmの椀で、端部が肥厚し内傾する面が作り出されている。底部外面に手持ちヘラケズリを施すが、中心にはケズリ調整がおよばず不調整部分が残る。

10・11は口縁部にかえりのある蓋である。10は口縁部がシャープで、つまみは宝珠形である。11は10に比べると全体的に器壁が厚く、つまみはボタン形である。10・11ともに頂部外面に回転ヘラケズリを施したのちに、つまみを接合する。12・13は口縁部に向かってすぼまる椀で、ともに口径は10cm程度を測り、底部に回転ヘラケズリが施されるうえ、体部にはそれぞれ凹線が設けられる丁寧なつくりの個体である。同形の身と蓋が2点ずつ存在することから、これらは有蓋椀であると考えられる。発掘調査時の写真1においては椀に蓋が載っていた状況が認められ、撮影時に意図的に椀と蓋を組み合わせた可能性もあるが、少なくとも調査当時から蓋が杯ではなく椀とのセットとして認識されていたことを重視し、これらを2組の有蓋椀として報告する。身と蓋の収まり方からセット関係は、10-12、11-13の組み合わせが想定される。10-12がロクロ時計回り、11-13がロクロ反時計回りで製作されており、セットで生産されていた可能性もあるが、組み合う蓋と身で焼成・色調が若干異なる。10の底部内面には自然釉が付着しており、少なくとも窯詰めの際は組み合わされていないようである。

14は口径13.7cm、器高13.5cmを測る長脚の高杯である。杯部はかえりのない丸底のもので、脚部には中央に1条の沈線があるが透かしがない。脚部接合前に杯底部には回転ヘラケズリを施している。15は口径10.9cm、器高9.7cmを測るやや短い脚に底の深い身が伴う高杯である。椀身の底部と体部の間には明瞭な稜線が認められ、体部は直立し、脚端部は内側にやや屈曲する。

16は丸底の壺らしき器種の底部である。外面には自然釉、窯壁片のような付着物が看取される。

## (2) 時期

太田森2号墳出土須恵器の主体を占めているのは受け部をもたない杯身で、これに加えて椀に付属するかえりをもった蓋が年代的位置づけを考える上で参考になる。これらはいずれも7世紀前半に一般的な金属器模倣に由来する器種である(西1986)。2点の椀蓋はかえりが大きく、西弘海による飛鳥編年(西1986)における飛鳥Ⅰ的な様相を備えている。このような有蓋椀は京丹後市久美浜町湯舟坂2号墳に類例があり、出土状況から7世紀前半の早い段階までに位置づけられる(久美浜町教育委員会1983)。また、類似した形態の椀が宇治市隼上り瓦窯2号窯灰原から出土しており(宇治市教育委員会1983)、この灰原出土資料は7世紀第1四半期から第2四半期の間ごろの年代が想定されている(菱田1986)。一方、太田森2号墳出土土器のうち、有蓋椀の椀身と蓋がともにケズリ調整を施し丁寧に製作されているのとは対照的に、杯身はいずれも底部ヘラキリ不調整である。これらの杯がかえりのある蓋が組み合う杯Gの杯身と形態的に類似することを重視し、7世紀の土器編年の標識資料となる飛鳥地域の様相と比較する。飛鳥地域において底部ヘラキリ不調整の杯Gが主流となるのは、飛鳥Ⅱの標識資料である坂田寺SG100出土資料の段階である(深澤2002)。ただし、口径11cm前後の太田森2号墳出土の杯は坂田寺SG100出土杯Gよりも口径が大きく、飛鳥Ⅱ前後の様相をもつといえる。単純に飛鳥地域における年代観を適用することはできないものの、太田森2号墳

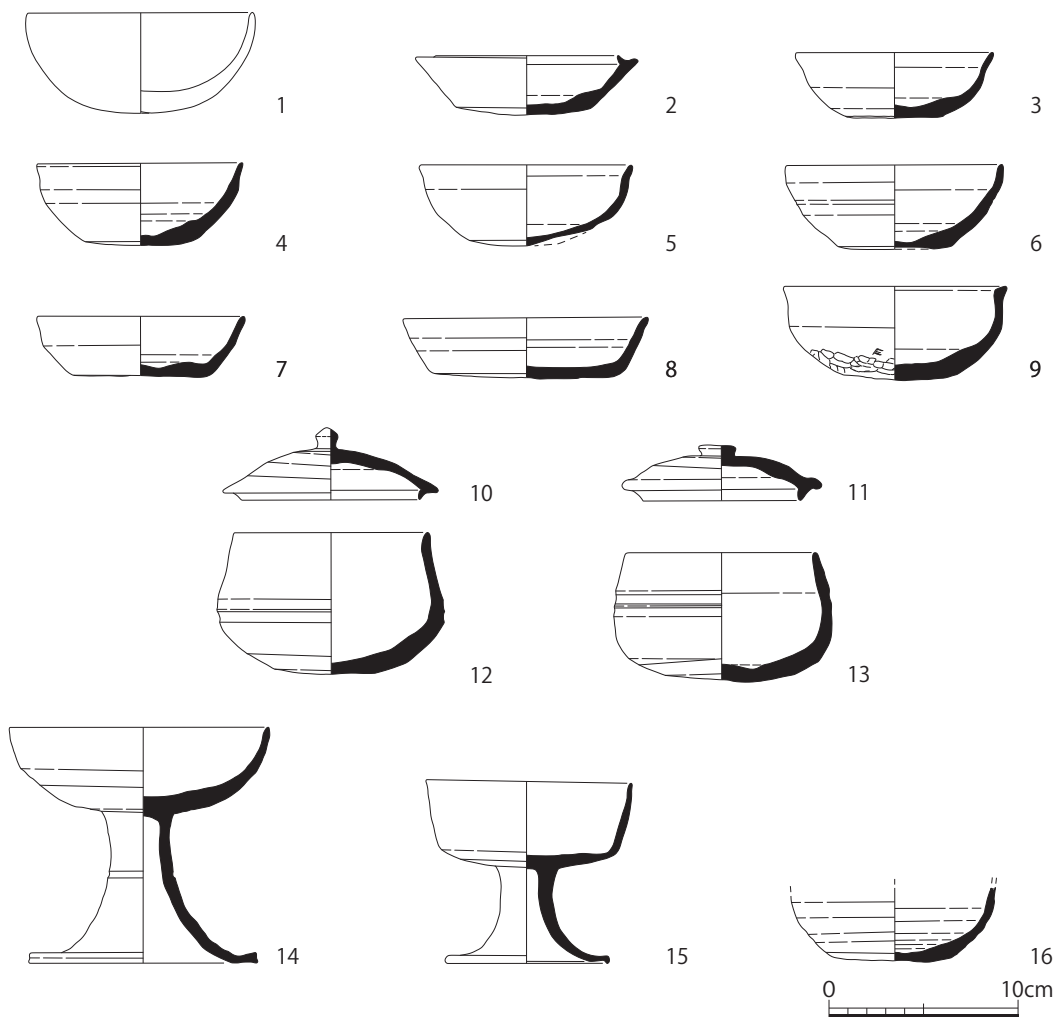


図2 太田森2号墳出土土器 (S=1/4)

表2 太田森2号墳出土土器観察表

番号	器質	器種	法量 (cm)			残存率	重量 (g)	色調		胎土	焼成	技法上の特徴	備考
			口径	底径	器高			外面	内面				
1	土師器	椀	11.9	—	5.3	40%	(130)	橙色	橙色	密 (φ3~6mmの砂礫を少量、φ1~2mmの白色砂粒を多量含む)	良好	全体ナデか	底部外面に擦痕
2	須志器	杯身	9.7	7.2	3.1	99%	(127)	灰白色	灰白色	密 (φ1mm以下の白色砂粒・黒色砂粒を少量含む)	軟質	底部ヘラキリ不調整	底部内面に静止ナデ
3	須志器	杯身	10.6	—	3.5	90%	(107)	灰色	灰色	密 (φ1~2mmの白色砂粒を多量含む)	硬質	底部ヘラキリ不調整	石膏補填
4	須志器	杯身	10.9	—	4.3	99%	(153)	灰白色	灰白色	密 (φ1~2mmの砂礫を少量含む)	軟質	底部ヘラキリ不調整	底部内面に静止ナデ
5	須志器	杯身	11.2	—	4.3	90%	(100)	灰白色	灰白色	密 (φ1~2mmの砂礫を少量含む)	軟質	底部ヘラキリ後ナデか?	
6	須志器	杯身	11.4	6.0	4.5	99%	(137)	灰白色	灰白色	密 (φ1mmの砂礫を多量、φ3~5mmの砂礫を少量含む)	軟質	底部ヘラキリ後ナデか?	
7	須志器	杯身	10.9	7.2	4.3	完形	138	灰白色	灰白色	密 (φ1~2mmの砂礫を少量含む)	軟質	底部ヘラキリ不調整	底部内面に静止ナデ
8	須志器	杯身	13.0	9.5	3.3	90%	(153)	灰色	灰白色	密 (φ1mm以下の白色砂粒、φ2~5mmの砂礫を少量含む)	良好	底部ヘラキリ不調整	
9	須志器	椀	11.9	—	5.0	完形	281	暗灰色	灰色	密 (微細な白色砂粒を含む)	硬質	底部外面に手持ちヘラケズリ	底部外面の中心は不調整
10	須志器	椀蓋	9.4	—	3.8	完形	126	灰色	灰色	密 (φ1~2mmの白色砂粒を多量含む)	硬質	つまみ接合前に頂部外面を回転ヘラケズリ、ロクロ時計回り	
11	須志器	椀蓋	8.3	—	2.9	完形	130	灰色	灰色	密 (φ1mmの白色砂粒を多量含む)	良好	つまみ接合前に頂部外面を回転ヘラケズリ、ロクロ反時計回り	
12	須志器	椀身	10.2	—	7.5	完形	311	灰~青灰色	灰~青灰色	密 (φ1mm以下の白色砂粒・無色砂粒を多量含む)	良好	底部ヘラキリ後回転ヘラケズリ、ロクロ時計回り	沈線状のくぼみ、底部外面に木片付着
13	須志器	椀身	10.0	—	6.8	完形	364	青灰色	灰色	密 (φ2~3mmの白色砂粒を多量含む)	硬質	底部ヘラキリ後回転ヘラケズリ、ロクロ反時計回り	沈線状のくぼみ、底部内面に自然軸
14	須志器	高杯	13.7	12.0	13.5	杯部60% 脚部80%	(391)	青灰色	オリーブ灰色	密 (φ1mm以下の白色砂粒を中量含む)	良好	脚部接合前に杯部の底部外面をヘラケズリ	底部内面に静止ナデ
15	須志器	高杯	10.9	8.5	9.7	完形	234	灰色	灰白色	密 (φ2~3mmの砂礫をわずかに含む)	硬質	脚部接合前に杯部の底部外面をヘラケズリ	
16	須志器	壺か	—	—	(3.9)	—	(149)	灰白色	灰白色	密 (φ1~2mmの砂礫を少量含む、黒色溶解粒みられる)	硬質	丁寧なナデ	底部内面に静止ナデ、底部外面に自然軸・溶着物

群出土土器群は7世紀前半～半ば頃と想定して大過ないだろう。

なお、椀と杯の間の底部ヘラケズリの有無が太田森2号墳出土土器群内の時期差を反映している可能性もあるが、底部調整の差異が時期差もしくは器種差に起因するかは判別がつかないため、追葬の有無を判断するのは難しい。また、8は他に比べて新相を示す器種とみられるが詳細な年代を決め難いうえ、他の太田森2号墳出土土器にはあるラベルが貼られていない。資料の入れ替わりによる混入品の可能性もあるため、積極的な評価は避ける。(溝口)

#### 4. 出土金属製品

##### (1) 鉄刀(図3、写真6)

『史の友』第7集に掲載されている「彼岸塚古墳報告」をみると、「直刀 三口(方頭大刀) 四十六糎 五十二糎 三十糎断片」とあり(夜久野史友会1957)、以下に図示する3点の大刀(片)がこれらに対応するとみられる。1は全長や茎部形状からみて、1956年3月の発掘調査時の遺物出土状況(玄室北壁玄門付近)に写っている鉄刀と対応するとみられる(写真1)。これが認められるならば2・3は発掘調査に先立ち、衣川悦夫氏によって採集された「直刀二口」に該当するのであろう。これらもやはり玄室中ほどの北壁沿いから出土したようである(月見1956)。

まずは刀身についてみる。1は現存全長51.0cm、現存重量200.5g、刃部は現存長41.7cm、最大幅3.2cm、最大厚0.5cm、茎部は現存長9.3cm、最大幅2.3cm、最大厚0.4cmである。完形に復元されているが、切先や刃部の大部分は明らかに保存修復の際の補填であり、長さや重さについてはあくまで参考値である。関は刃部側が直角、背側が斜角の両関であるが、両者の位置は対応しない。また肉眼観察による限り目釘は確認できない。

2は現存全長45.5cm、現存重量186.9g、刃部は現存長38.7cm、最大幅2.6cm、最大厚0.6cm、茎部は現存長6.8cm、最大幅2.2cm、最大厚0.4cmである。保存修復の際に補填されているが、その範囲は明瞭でなく、長さや重さについてはあくまで参考値である。両関式であるがその位置は厳密には対応しない。刃部の刃関部付近は刃をつくりだしていないようにみえる。肉眼観察による限り目釘の位置は判然としない。

3は切先側を欠くが、茎部はほぼ完存する。現存全長29.7cm、現存重量102.7g、刃部は残存長23.0cm以上、最大幅2.9cm、最大厚0.5cm、茎部は長さ4.4cm、最大幅2.1cm、最大厚0.3cmである。保存修復の際に樹脂により大きく補填されており、刃部の長さや重さについてはあくまで参考値である。両関式で、肉眼観察による限り目釘の位置は判然としない。

次に鉄製装具についてみる。4は方頭柄頭装具で、『京都 夜久野の文化財』に掲載の鉄刀集合写真では1の大刀の柄頭として配置されている(写真2)。一部補填されているようだがほぼ完形とみられる。長さ4.4cm、最大幅2.1×3.6cm、重さ21.7gの断面倒卵形で、口縁端部を肥厚させている。内面にかすかに縦方向の木質が付着している。5はほぼ完形の鐔である。『京都 夜久野の文化財』に掲載の鉄刀集合写真では1の大刀の関部付近に鏝着した状態で写っている(写真2)。長さ

4.2cm、幅2.8cmの倒卵形で、厚さ0.2cm、重さ6.5gである。6は断面倒卵形の環状を呈する装具である。貴金具、あるいは柄に伴う何らかの装具の可能性はある。『京都 夜久野の文化財』に掲載の鉄刀集合写真では2の大刀に伴うものとして配置されている（写真2）。長さ3.6cm、幅2.3cm、重さ2.7gである。0.5×0.2cmの鉄棒を折り曲げて倒卵形につくっている。7は鍔で半損している。いずれの大刀に伴うかは明らかでない。残存長2.3cm、残存幅1.5cm、重さ2.7gである。1.2×0.2cmの鉄板を折り曲げて倒卵形につくっている。端部の一方にわずかに段が認められる。8は鞘尾装具とみられ、半損している。いずれの大刀に伴うかは明らかでない。長さ1.8cm、幅3.0×1.0cm以上で、重さ8.8gである。（諫早）

(2) 鉄鍔（図4、表3、写真7）

計18点を確認した<sup>(5)</sup>。1～9は平根系<sup>(6)</sup>鉄鍔である。そのうち1～6は腸抉をもつ。1は鍔身部が大きく、上部が張り出し、刃先にかけて丸みを帯びる。頸部と茎部の境界がない。2は鍔身部中央にくびれがなく、五角形に近い形になっている。3は鍔身部が小さく、頸部

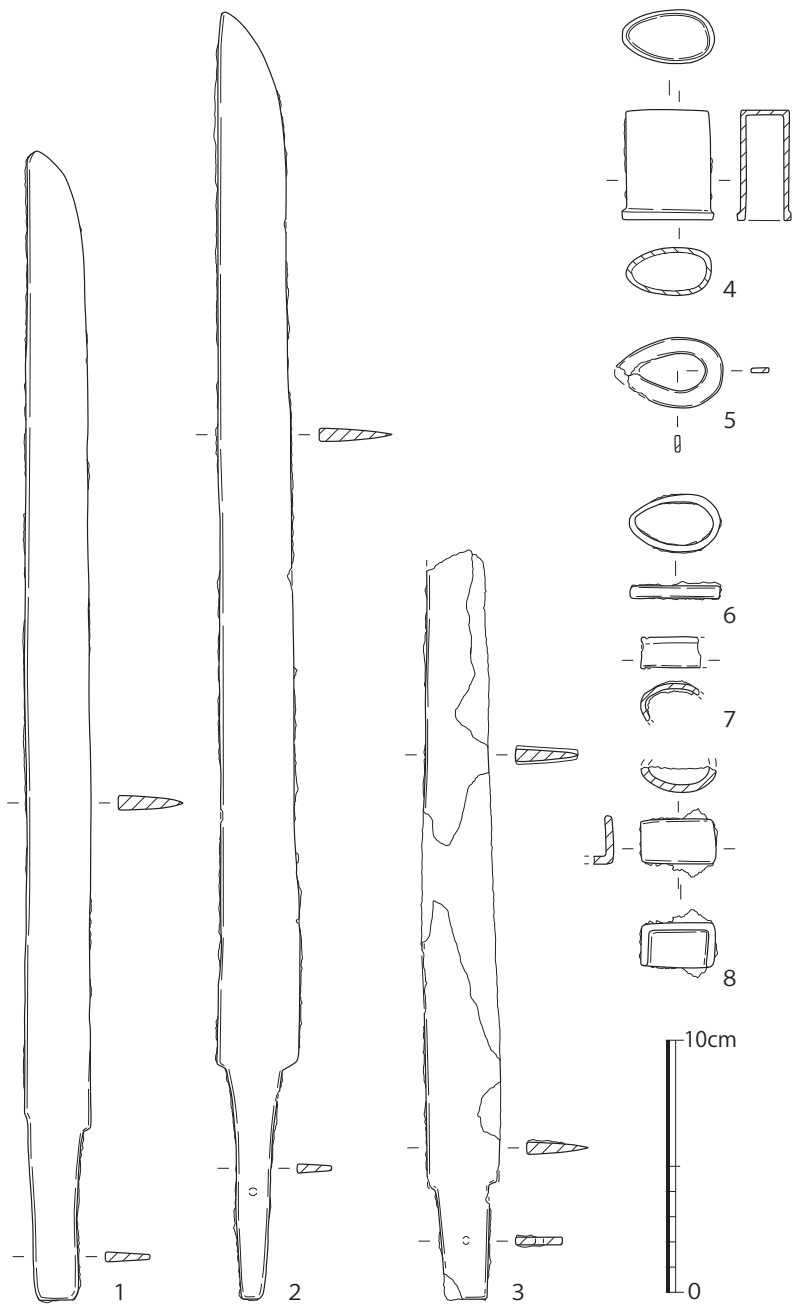


図3 太田森2号墳出土鉄刀 (S=1/3)



写真2 太田森2号墳出土鉄刀集合写真  
(夜久野町教育委員会 1981)

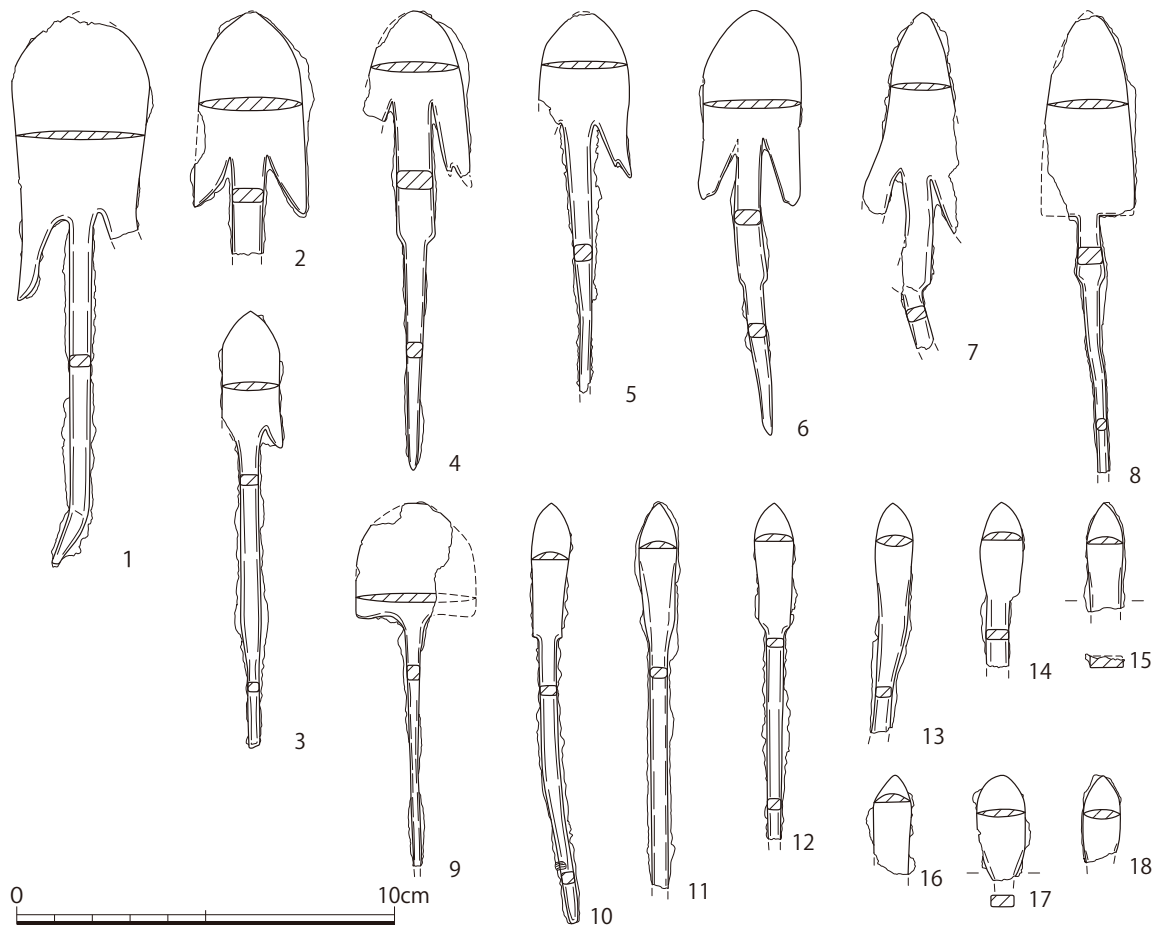


図4 太田森2号墳出土鉄鍬 (S=1/2)

表3 太田森2号墳出土鉄鍬計測表

番号	全長	鍬身部長	鍬身部幅	鍬身部厚	頸部長	頸部幅	頸部厚	茎部長	茎部幅	茎部厚	重さ (g)
1	※14.5	※7.5	3.7	0.2	—	—	—	※9.1	0.6	0.3	25.7
2	※6.5	※5.3	2.7	0.4	※2.6	0.8	0.4	—	—	—	16.1
3	11.6	3.6	1.4	0.2	5.2	0.4	0.3	3.4	0.3	0.3	10.5
4	12.1	※4.4	2.3	0.3	3.5	1.0	0.5	6.2	0.4	0.4	15.0
5	※10.0	※4.3	2.3	0.2	—	—	—	※7.1	0.5	0.4	9.8
6	11.3	5.2	2.6	0.2	3.7	0.7	0.4	4.2	0.5	0.4	9.9
7	※9.0	※5.9	1.6	0.2	3.0	0.7	—	※1.7	0.5	0.3	14.2
8	※12.1	※5.3	2.1	0.3	1.6	0.7	0.4	※5.2	0.3	0.3	12.6
9	9.6	3.1	※2.6	0.2	—	—	—	※6.6	0.3	0.4	7.8
10	11.2	3.6	1.0	0.2	—	—	—	7.6	0.4	0.3	6.5
11	※10.2	3.2	1.0	0.2	—	—	—	※0.7	0.5	0.3	7.4
12	※8.9	3.3	1.0	0.2	—	—	—	※5.6	0.5	0.3	5.5
13	※6.1	—	1.0	0.3	—	—	—	—	0.4	0.3	4.0
14	※4.4	—	1.1	0.2	—	—	—	—	0.7	0.3	2.3
15	※2.7	1.8	1.0	0.2	—	—	—	—	0.9	0.3	1.7
16	※2.6	※2.6	1.0	0.2	—	—	—	—	—	—	1.7
17	※2.8	2.0	1.3	0.2	—	—	—	—	—	0.3	2.7
18	※2.3	2.0	1.0	0.3	—	—	—	—	—	—	2.1

※は残存長



関がナデ関である。4は腸袂が長く、二重腸袂になっている。頸部関はナデ関である。5も二重腸袂をもつ。頸部関はない。6は腸袂の先端部に段をつくっており、二重腸袂を意識しているものとみられる。頸部関はナデ関である。7はふくらが弱く、長三角形を呈す。腸袂の先端形状は欠損しており不明である。頸部関はナデ関である。8は鍔身部が長三角形を呈する。鍔身関部は角関で、頸部関はナデ関である。9は鍔身部を大きく欠損しており平面形は不明だが、鍔身関は角関である。頸部と茎部の境がない。

10～18は鍔身部が柳葉形の長頸鍔である。10は片丸造で鍔身関部が角関である。頸部関はなく、茎部には矢柄とみられる有機質が付着している。11は片丸造である。ナデ関が確認できるが、関部から2.1cm上の箇所まで刃が終わっている。頸部と茎部の境界は不明であるが、長さからみて、おそらくナデ関より上が鍔身部であろう。12は片丸造で鍔身関はナデ関である。13は両丸造で関の形状が明瞭でない。14は片丸造の鍔身部と頸部が接着されたものである。15・16は片丸造の鍔身部である。鍔身関は折損している。17・18は両丸造の鍔身部で下部のすぼまりが強いことから、鍔身関はナデ関である可能性が高い。

平面形が五角形を呈する平根系鉄鍔は、7世紀ごろから東海や関東甲信地域を中心に分布する（水野2007）。東西の鉄鍔の地域性が顕著になり型的交流がなくなるとされる後期に、丹波地域で2のような鉄鍔が副葬されていることは注目に値する。（池田野々花）

### （3）馬具

鉄製素環轡（図5、写真11） 完形で遺存状態は極めて良好、重さは152.0gである。「彼岸塚古墳報告」にみえる「銜一ヶ」が本資料に該当するとみられ（夜久野史友会1957）、出土状況写真から玄室北壁玄門付近から出土していることがわかる（写真1）。二連式銜の外環に、鉸具造の立間部をもつ素環と1條線引手をそれぞれ連結する構造である。以下、部品ごとに詳しくみていく。

素環は左右いずれもI字形刺金をもつ鉸具造の立間部を採用するなど同巧で、右側が全長11.6cm、最大幅6.4cm、左側が全長11.8cm、最大幅6.5cmとほぼ同形同大である。立間部は頸部が長く、独立した鉸具を含む複数の部品を鍛接したとみられるが、肉眼観察では鍛接位置は判然としない。銜は右側が長さ7.6cm、外環径2.8cm、内環径1.5cm、左側が長さ9.4cm、外環径3.3cm、内環径2.0cmである。左銜は外環と内環を直交させている。いずれも厚さ0.6cmのほぼ同じサイズの鉄棒の両端を折り曲げて環部を成形しているが、右銜の方が左銜よりも短く、また右銜内環のみ折り返して鍛接せずに仕上げている。轡は左右対称を基本とするため、右銜内環については製作時の修繕ないし、使用後の破損に伴う修理とみるのが妥当であろう。引手は外環を曲げない直柄の1條線引手である。右側が長さ16.9cm、外環径2.5cm、内環径1.9cm、左側が長さ17.3cm、外環径2.4cm、内環径1.9cmで、いずれも厚さ0.6～0.7cmの鉄棒の両端を折り曲げて環部を成形している。

諸氏の分類に照らし合わせると岡安光彦（1984）の鉸具造り立間系にあたり、氏の第Ⅳ～Ⅴ段階（TK209～TK217型式期）、花谷浩（1986）の鉸具造り立間素環鏡板付轡b類Ⅰ式にあたり、氏の第3群（TK209～TK217型式期）にそれぞれ該当する。ただし同時期の鉸具造立間式素環轡の中に

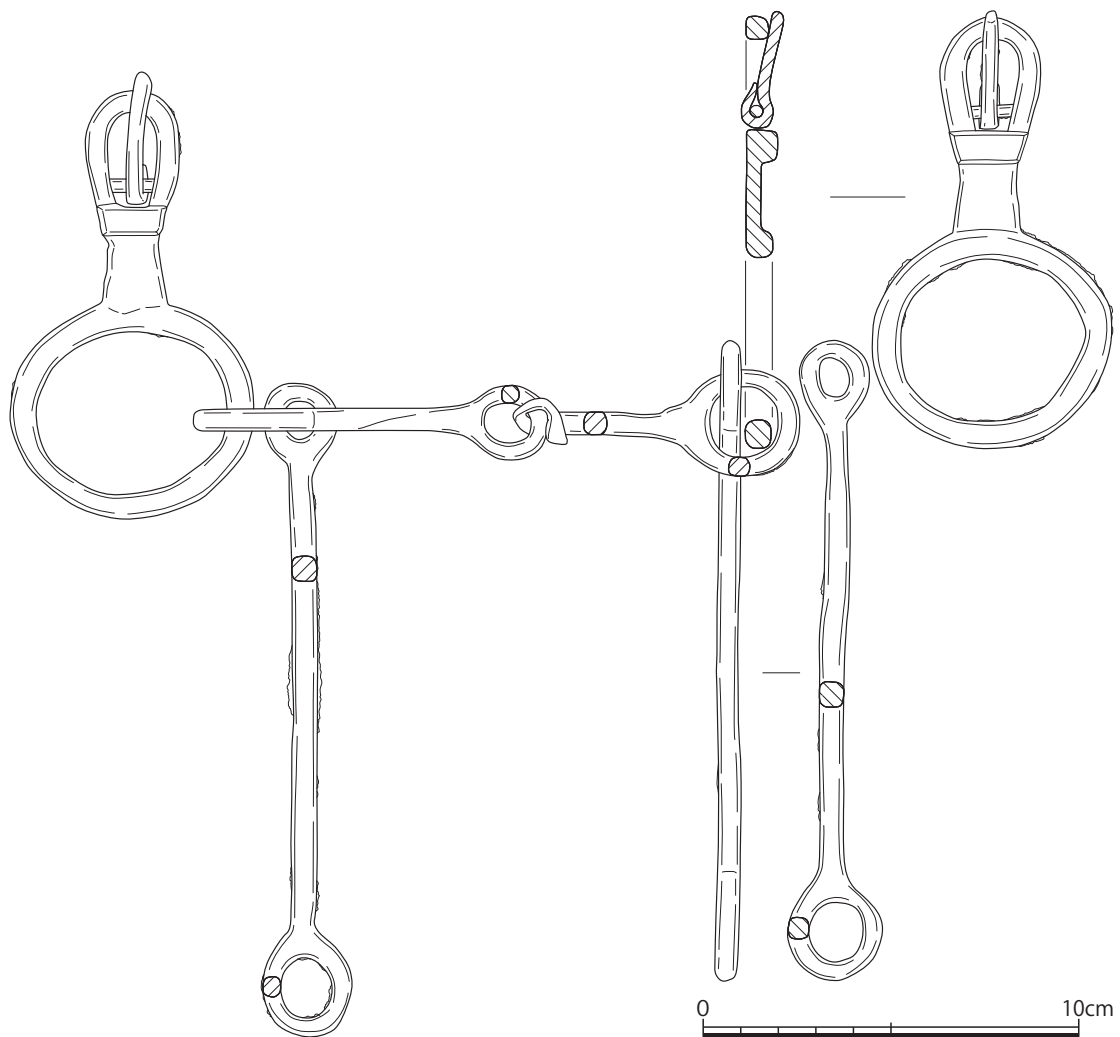


図5 太田森2号墳出土馬具(1) (S=1/2)

は素環の高さが72mm前後の極めて規格性の高い一群が存在することが明らかとなっているが(岡安1985)、本例はそれらとはまったく形態が異なることが留意される。鉸具を独立してつくる点や長い頸部をもつ点は、花谷の第2群(MT85~TK43型式期。一部TK209型式期とも共伴)に位置づけられている和歌山県鳴滝1号墳出土例や島根県上島古墳出土例のような初期の鉸具造立聞素環轡と通じる。これらとは刺金の形態が異なり、素環のサイズも小さいため、ただちに編年的位置づけを溯上させる必要はないが、花谷の第2群と第3群を結ぶ過渡期的資料として評価することが可能だろう。

木心鉄板装壺鐙(図6、写真12) 2点出土しており、1が全長40.3cm、2が全長40.0cmである。木製の壺鐙本体は腐朽しているものの、鞍から垂下された力革と連結するための鉸具と三連の兵庫鎖からなる鐙鞞、壺鐙本体に取り付けられた吊金具からなる鉄製部品はほぼ完存する。つくりやサイズからみて、セットで製作されたとみられる。「彼岸塚古墳報告」に「鎖状の鉄塊(輪鐙)一ヶ」とあり(夜久野史友会1957)、数が合わないが、『京都 夜久野の文化財』(写真3-2)には2点が錆着した状態の写真が写っており、本墳出土とみて大過ない。

以下、各部品の形状についてみていく。鉸具は隅丸方形の輪金にI字形の刺金を取り付けるもの

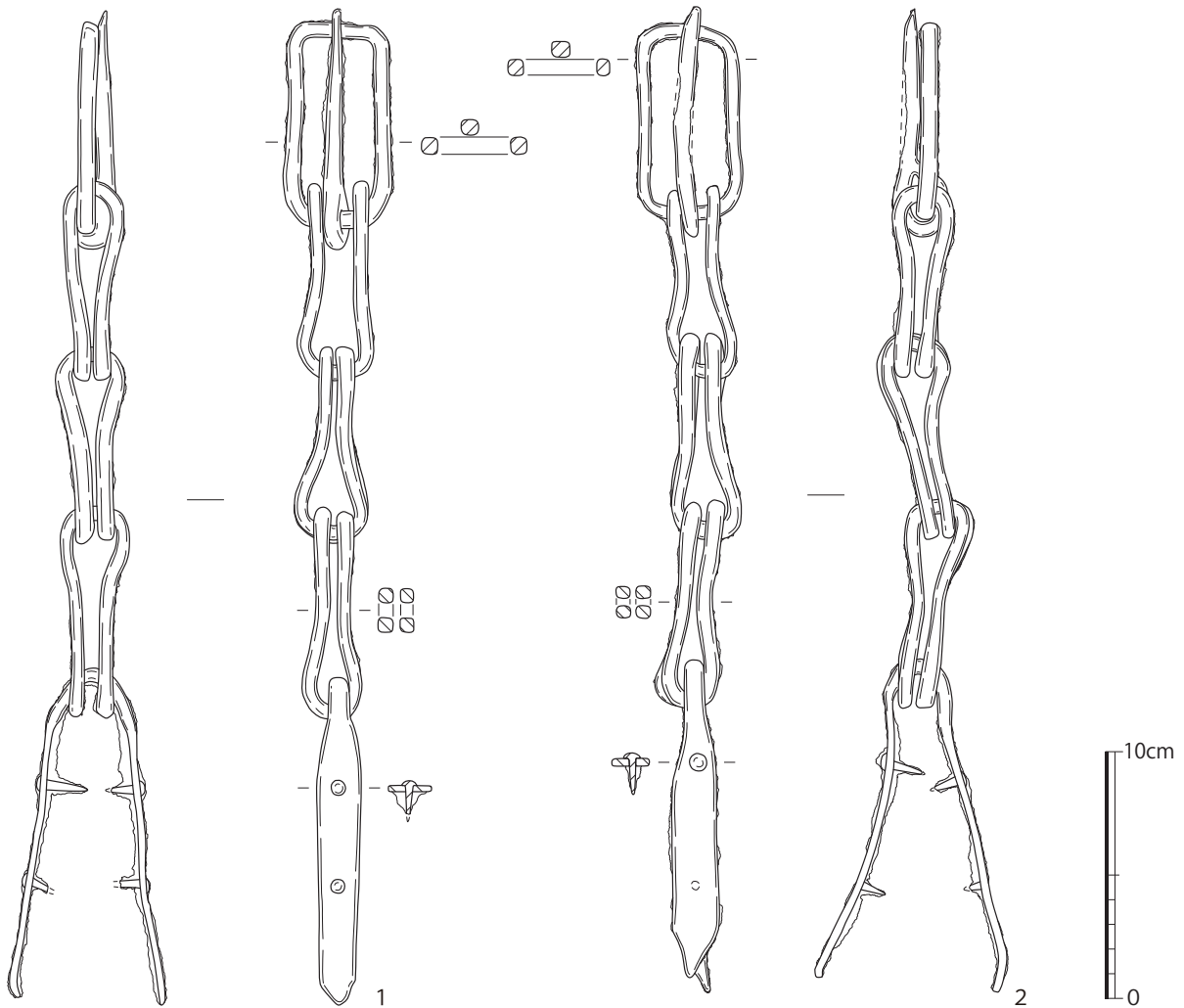


図6 太田森2号墳出土馬具(2) (S=1/3)

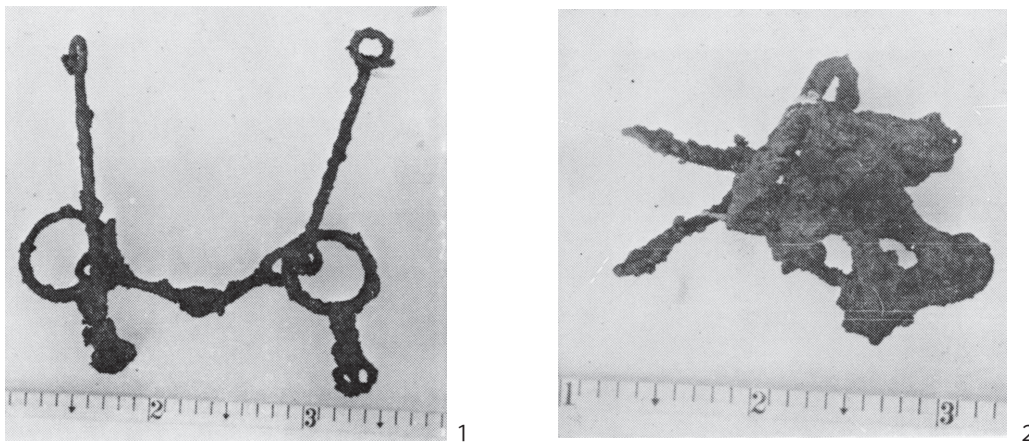


写真3 太田森2号墳出土馬具(1:鉄製素環轡 2:木心鉄板装壺鐙) (夜久野町教育委員会 1981)

で、1は長さ9.7cm、幅4.4cm、2は長さ9.3cm、幅4.3cmである。兵庫鎖は、長さ16cmほどの長楕円形の鉄棒を鉸具側から二つに折り曲げて、互い違いに環部をつくりだしている。一連の長さは7.8～8.6cm、兵庫鎖三連の全長は1が21.7cm、2が21.1cmである。吊金具は1が長さ13.6cm、最大幅6.3cm、2が長さ13.5cm、最大幅7.8cmである。頭部は厚さ0.6cmの棒状、脚部は最大幅1.8cm、厚さ0.2～0.3cmの板状を呈する。脚部には鉤頭径0.6cm、鉤頭高0.2cm、全長1.8～2.1cmの鉄製円頭鉤を左右2

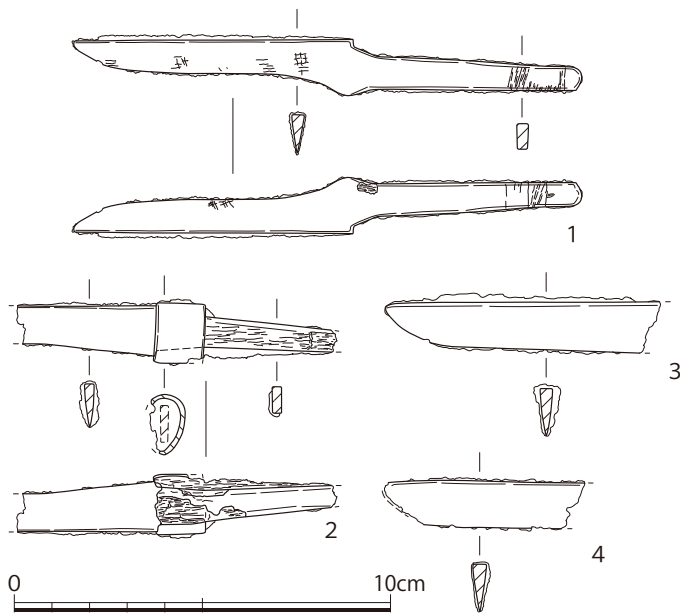


図7 太田森2号墳出土刀子 (S=1/2)

茎部幅0.8cm、厚さ0.4cm、重さ18.5gをはかる完形の刀子である<sup>(8)</sup>。棟関は明瞭な角関であるが、刃関はナデ関である。刀身部には皮革とみられる網状組織の付着が確認され、革製鞘であったとみられる。関部には横方向の木質の付着が確認できるが、茎部の茎尻に近い部分から糸巻痕の付着も確認できた。2は残存長8.5cm、刀身幅1.0cm、茎部幅0.7cm、厚さ0.3cm、重さ10.5gをはかる。関部の破片で、鉄製の釦を伴っている。刀装具が残存しているため棟関は不明であるが、刃関は角関である。茎部には横方向の木質が付着している。3は刀身部片で残存長7.4cm、刀身幅1.3cm、厚さ0.3cm、重さ12.5gをはかる。表面には皮革とみられる網状層が付着しており、革鞘であったと考えられる。4も刀身部片で残存長5.3cm、刀身幅1.2cm、厚さ0.4cm、重さ6.0gをはかる。全体が銹に覆われており、有機質を確認することは難しい。

(5) 鑿状鉄製品 (図8)

先端の一辺にのみ刃部が確認できる鉄製品で残存長8.8cm、幅0.4cm、厚さ0.4cm、重さ6.9gをはかる。鑿の可能性はある。

(池田)



図8 太田森2号墳出土鑿状鉄製品 (1/2)

(6) 鉄釘 (図9、表4、写真9)

鉄釘が14点出土している。1～13は保存処理がなされており、14～16は未処理の鉄製品片をまとめた袋より抽出した。頭部はすべて叩き潰した後折り曲げるタイプである。1は残存長6.2cmをはかる。先端部を欠き、ほかの釘より比較的長方形に近い断面形をもつ。2はほぼ完形で、残存長6.6cmをはかる。身部の先端側が若干折れ曲がっている。3は残存長5.5cmで、2と同様先端側に歪みがある。4は残存長4.5cmで、頭部から2.2cmの間に横方向の木質が遺存する。2.2cmより先端側にも木質らしき痕跡がみられるが、繊維の方向は判別できなかった。5は残存長5.8cm、6は残存長6.6cmをはかる。どちらも先

鉾つつ計4鉾打ちこみ、壺鍔本体と固定する。また、脚部先端は鋭角をなし、やや内側に折れ曲がっており、先端も壺鍔本体に打ち込んでいたとみられる。脚部内面には長軸におおむね併行する木質が付着している。

斎藤弘(1986)分類の三D式に該当し、氏の壺鍔編年のⅢ期(TK43～TK209型式期)に位置づけられる。

(諫早)

(4) 刀子 (図7、写真8)

計4点が出土している。1は全長13.6cm、刀身長7.5cm、刀身幅0.9cm、

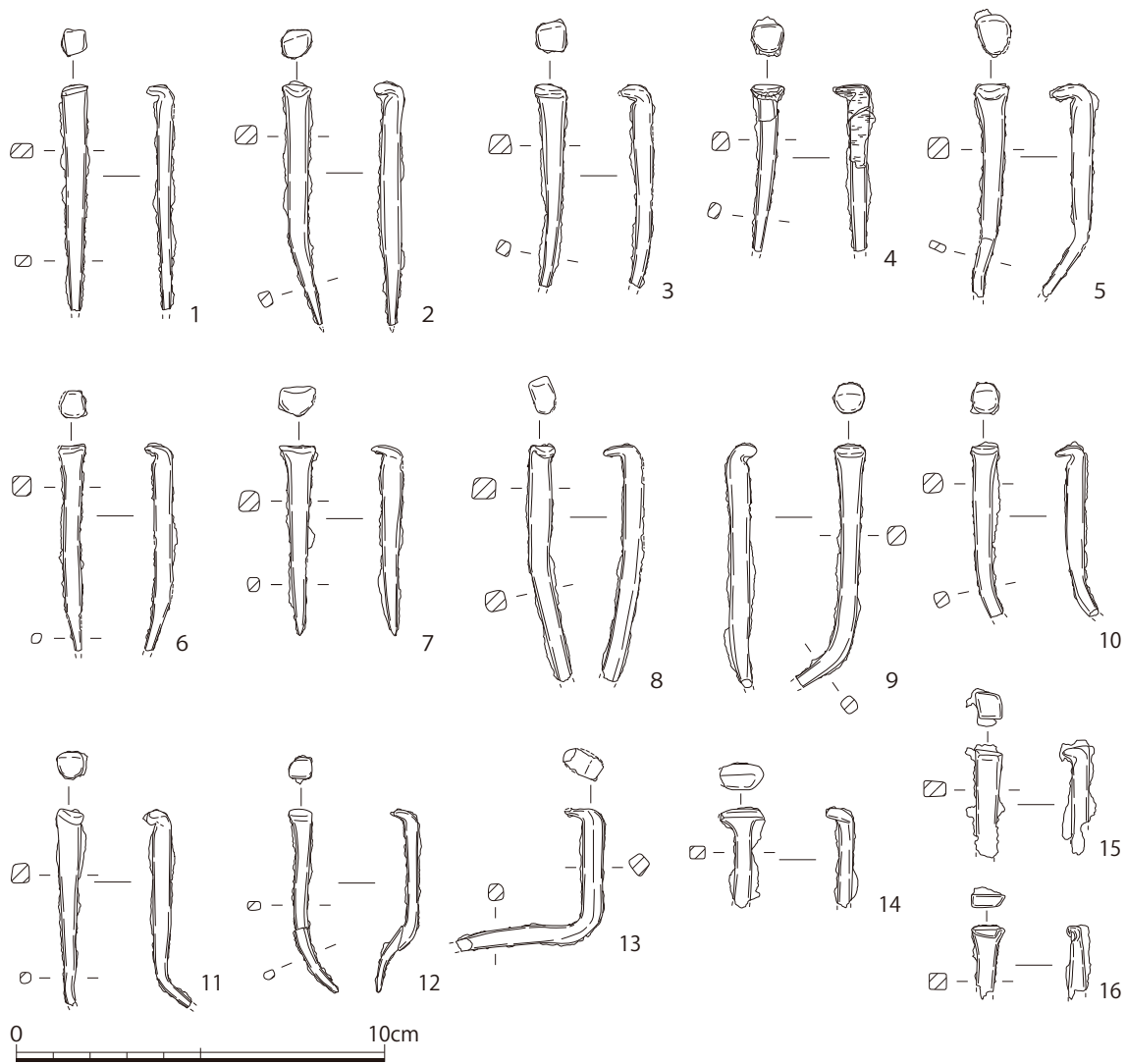


図9 太田森2号墳出土鉄釘 (S=1/2)

端部を欠き、先端側がやや折れ曲がる。7は完形で、全長5.2cmをはかる。8～11はいずれも先端部を欠き、先端部がやや折れ曲がる。12は完形で、全長5cmをはかる。ほかの鉄釘より断面形長方形に近く、華奢なつくりである。先端部が歪んでいる。13は残存長6.9cmをはかる。頭部と先端部を欠き、ほぼ直角に折れ曲がる。14～15はいずれも頭部から2cm程度までしか残存しておらず、14にのみわずかに横方向の木質が看取される。

以上の鉄釘は平井洸史（2021）による

表4 太田森2号墳出土鉄釘計測表

番号	全長 (cm)	重量 (g)	木質	頭部形態	備考
1	(6.2)	4.0	—	折曲a	
2	(6.6)	5.1	—	折曲a	身部がやや折れ曲がる
3	(5.5)	4.2	—	折曲a	身部がやや折れ曲がる
4	(4.5)	2.9	頭部付近に横方向	折曲a	
5	(5.8)	5.1	—	折曲a	身部がやや折れ曲がる
6	(6.6)	3.6	—	折曲a	身部がやや折れ曲がる
7	5.2	3.9	—	折曲a	完形。短い
8	(6.5)	6.5	—	折曲a?	身部がやや折れ曲がる
9	(6.6)	6.6	—	折曲a	身部がやや折れ曲がる
10	(4.8)	3.7	—	折曲a	身部がやや折れ曲がる
11	(5.4)	3.6	—	折曲a	身部がやや折れ曲がる
12	5.0	1.9	—	折曲a	身部がやや折れ曲がる
13	(6.9)	5.2	—	折曲a	身部がほぼ90°に曲がる
14	(2.5)	1.7	頭部付近に横方向	折曲a	鉄片群から抽出。未処理
15	(3.0)	2.4	—	折曲a	鉄片群から抽出。未処理
16	(2.0)	1.1	—	折曲a	鉄片群から抽出。未処理

※ ( ) は残存値

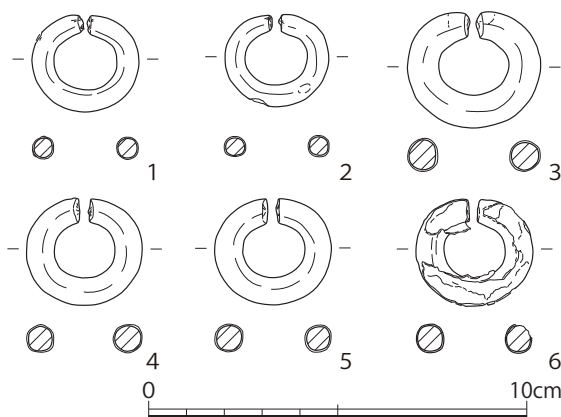


図10 太田森2号墳出土耳環 (S=1/2)

表5 太田森2号墳出土耳環計測表

番号	材質	大きさ (cm)		断面		重量 (g)	備考
		タテ	ヨコ	形状	直径 (cm)		
1	銅芯銀板張	2.5	2.8	略円形	0.6	13.4	開口面に折込皺
2	銅芯銀板張	2.4	2.7	略円形	0.6	10.6	開口面に折込皺
3	銅芯銀板張	2.8	3	略円形	0.7	21.4	開口面に折込皺
4	銅芯銀板張	2.8	3.1	略円形	0.7	22.2	開口面に折込皺
5	銅芯銀板張	2.8	3.1	略円形	0.7	17.3	開口面に折込皺
6	銅芯銀板張	3.0	3.5	略円形	0.8	35.6	開口面に折込皺

り先端側は有機質が不明瞭になっており、少なくとも2.2cm以上の厚みをもつ棺材であることは確実である。 (守田)

(7) 耳環 (図10、表5、写真10-1~6)

6点の銅芯銀板張耳環が出土している。「彼岸塚古墳報告」をみると、「耳環(銅地銀張)六ヶ」とあり、これに対応するとみられる。玄室北壁玄門付近の出土状況写真に2点の耳環が写っており(写真1)、玄室西半部からも「緑色の管玉二個」とともに「耳環四個」が出土しているが(月見1956)、個々の資料の出土位置は不明である。サイズから小型・中型・大型の3つに分類することができ、中型は2対分確認できるため、少なくとも4対の耳環が副葬されたものとみられる。小型は1・2で、直径2.4×2.8cm、太さ0.6cmの断面略円形で、重さが若干異なるものの、セットとみられる。中型は3~5で、直径2.8×3.1cm、太さ0.7cmの断面略円形で、重さからみて、3・4がセットとみられる。大型は6で、直径3.0×3.5cm、太さ0.8cmの断面略円形である。35.6gと最も小さい2(10.6g)の3倍以上の重量がある。いずれも開口面に被覆板の折込皺が認められ、銅芯が一部露出している個体や表面に緑青が析出している個体もあり、いずれも銅芯銀板張と判断される。澤田秀実分類に照らし合わせれば1~5がB2類、6はB3類にあたり、前者がTK43~TK209型式期、後者がTK209型式期の須恵器とおおよそ共伴する(澤田2022)。 (諫早)

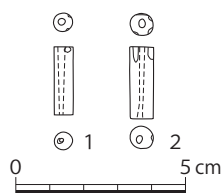


図11 太田森2号墳出土管玉 (S=1/2)

(8) 管玉 (図11、写真10-7~8)

2点の管玉が出土している。記録によると旧夜久野地域において管玉が出土した古墳は2基あり、一方は「直聖約三分長さ一寸余緑色に出雲玉石」(中夜久野村1956、夜久野史友会1957)が出土した長者森古墳、他方は「管玉二ヶ」(夜久野史友会1956・1957、下夜久野村誌刊

頭部形態の分類では折曲a型式にあたる。完形のものはないがいずれも10cmを越える可能性は低く、長さはⅢ類である。このように頭部を折り曲げる小型の鉄釘はTK43型式期を境に増加し、7・8世紀の畿内を中心とした墳墓で出土する鉄釘では通有のものである(瀬川2005)。

これらは棺材を釘で接合した釘付式木棺に用いられたと考えられる。完形のものや木質が遺存する釘がほとんどないため棺の規模や棺材の厚みは不明であるものの、4は頭部から2.2cmにわたり横方向の木質が付着し、それより

行委員会1961)が出土した太田森2号墳である。図10の2点はともに、長者森古墳出土資料とは法量が一致しないことから、太田森2号墳に帰属すると考えられる<sup>(9)</sup>。

2点とも濃緑色を呈する碧玉製管玉で、目視によるが、島根県花仙山産碧玉に相当すると判断される。1は長さ20.2mm、直径5.7mmで、孔径は2.0mmを測る。大賀分類の領域JFaを指向する規格であり、古墳時代後期に製作された山陰系といえる(大賀2009)。片面穿孔で、孔壁面はなめらかであるため、穿孔には鉄針を使用したことがわかる。両端面は明瞭に研磨され、終孔部側の端面には穿孔具先端部からの圧力による円錐形剥離は認められなかった。

2は長さ20.9mm、直径6.5mmで、孔径は1.7mmを測る。大賀分類の領域JFaに入る。両端からの深度が非対称な両面穿孔で、孔壁面がなめらかであることから、鉄針で穿孔したと考えられる。古墳時代後期に製作された碧玉製管玉の大部分は片面穿孔であるが(大賀2009)、法量的指向性から判断すれば、2も1と同様に古墳時代後期に製作された山陰系といえる。両端面には明瞭な研磨が認められる。

領域JFaを指向する碧玉製管玉は、TK23型式期に出現し、MT15～TK10型式期で製作を終了したとみられており(大賀2009)、太田森2号墳出土管玉の製作年代は、須恵器から判断される築造時期よりも大きく遡るといえる。(横白彩江)

## 5. 小結

太田森2号墳(彼岸塚古墳)は、1956年に夜久野史友会によって発掘調査がおこなわれ、簡単な概報が出ていたが、出土遺物を含めた報告書は刊行されていなかった。主だった出土遺物は夜久野町化石・郷土資料館に所蔵されているが、調査開始時点では個々の出土遺物を太田森2号墳出土遺物かどうか特定することが困難な状況にあったため、報告文の記載や当時作成された略測の出土状況図や写真などと対応させながら、出土遺物の抽出作業をおこなった。その結果、須恵器15点(杯8点、無蓋椀1点、有蓋椀2組、高杯2点、壺らしき貯蔵具の底部1点、来歴不明品1点)、土師器(椀)1点、鉄刀3点、鉄鏃18点、馬具(鉄製素環轡1点、木心鉄板装壺鐙1組)、鉄製刀子4点、鑿状鉄製品1点、鉄釘14点、耳環6点、管玉2点について所在を確認し、資料化をおこなった。不確定な部分はあるものの、これまで一部資料の断片的な紹介に留まっていた太田森2号墳出土遺物の全容が、今回、初めて明らかとなったといっただろう。

古墳の築造時期(初葬時期)については、須恵器からみて7世紀前半(飛鳥Ⅰ)に求められ、7世紀半ば頃までの間(飛鳥Ⅱ)に追葬のあった可能性がある。鉸具造立間部をもつ素環轡がTK209～TK217型式期、木心鉄板装壺鐙がTK43～TK209型式期、鉄釘がTK43型式期以降、耳環がTK43～TK209型式期と、共伴する須恵器よりも全体にやや古相を示す点が留意される。とりわけTK10型式期で製作を終了したとみられる2点の碧玉製管玉については、伝世を考えるべきであろう。

なお今回報告した遺物はいずれも石室内の下層出土遺物とみられ、古墳の再利用に伴う上層出土土師器については所在を確認できなかった。(諫早)

## 註

- (1) なお、祝部1は平面図に記載がない数字である。
- (2) 遺物配列図にみられるほかの丸(○)は耳環であると推測した。
- (3) 図2-1~5・9~16には共通するラベルが貼付されているのを確認している。
- (4) 『丹波夜久野の文化財』(京都府立丹後郷土資料館1976)において太田森2号墳出土品として蓋杯2点の写真が挙げられているが、形状から杯身は長者森古墳出土品とみられる。
- (5) 保存処理がおこなわれた16点のほか、保存処理されていない鉄片の中から鍍身部が2点(16,17)見つかった。
- (6) 形状や各部名称は水野敏典分類(水野2013)に準拠する。
- (7) 第Ⅱ部3章の註4で述べられている長尾古墳の遺物の可能性がある。
- (8) 同上
- (9) 長者森古墳から出土したと推測される管玉は現在所在が不明である(Ⅱ部3章参照)。

## 参考文献

- 宇治市教育委員会1983『隼上り瓦窯発掘調査概報』
- 大賀克彦2008「古墳時代後期における玉作の拡散」『古代文化研究』第16号 島根県古代文化センター
- 大賀克彦2009「山陰系玉類の基礎的研究」『出雲玉作の特質に関する研究—古代出雲における玉作の研究Ⅲ—』島根県古代文化センター
- 大賀克彦2010「百留横穴墓群出土の玉類に関する諸問題」『百留横穴墓群』(上毛町文化財調査報告書第13集)上毛町教育委員会
- 岡安光彦1984「いわゆる「素環の轡」について—環状鏡板付轡の型式学的分析と編年—」『日本古代文化研究』創刊号 PHALANX—古墳文化研究会—
- 岡安光彦1985「環状鏡板付轡の規格と多変量解析」『日本古代文化研究』第2号 PHALANX—古墳文化研究会—
- 京都府立丹後郷土資料館1976『丹波夜久野の文化財』
- 久美浜町教育委員会1983『湯舟坂2号墳』
- 斎藤 弘1986「古墳時代の壺鏡の分類と編年」『日本古代文化研究』第3号 PHALANX—古墳文化研究会—
- 澤田秀実2022「耳環の生産体制と副葬の意義—使用された金属原材料の検討から—」『人・墓・社会—日本考古学から東アジア考古学へ—』雄山閣
- 瀬川貴文2005「釘付式木棺の受容と展開」『待兼山考古学論集—都出比呂志先生退任記念—』大阪大学考古学研究室
- 平井洸史2021「古墳時代の大和と河内における釘・鏡の消費様相とその背景」『古代学研究』230 古代学研究会
- 深澤芳樹2002「山田寺下層の土器について」『山田寺発掘報告書』(本文編)奈良文化財研究所
- 下夜久野村誌刊行委員会1961『下夜久野村誌』
- 田辺昭三1981『須恵器大成』角川書店
- 月見 修1956「彼岸塚古墳中間報告」『史の友』第1集 夜久野史友会
- 中夜久野村1956『天田郡中夜久野村沿革史(未定稿)』
- 西 弘海1986『土器様式の成立とその背景』真陽社



花谷 浩 1986 「素環鏡板付轡の編年とその性格」『山陰考古学の諸問題』山本清先生喜寿記念論集刊行会

菱田哲郎 1986 「畿内の初期瓦生産と工人の動向」『史林』第 69 卷 3 号 史学研究会

水野敏典 2007 「古墳時代鉄鍬研究の諸問題—東アジアの中の鉄鍬様式の展開—」『古代武器研究』8 古代武器研究会

水野敏典 2013 「⑤鉄鍬」『副葬品の型式と編年』（古墳時代の考古学 4）同成社

夜久野史友会 1956 『史の友』第 1 集

夜久野史友会 1957 「彼岸塚古墳報告」『史の友』第 7 集

夜久野町教育委員会 1981 『京都 夜久野の文化財』

夜久野町史編集委員会 2006 『夜久野町史』第二卷（資料編）福知山市

米田克彦 2009 「穿孔技術から見た出雲玉作の特質と系譜」『出雲玉作の特質に関する研究—古代出雲における玉作の研究Ⅲ—』島根県古代文化センター



写真4 太田森2号墳出土土器（1）（番号は図2に対応）



写真5 太田森2号墳出土土器 (2)

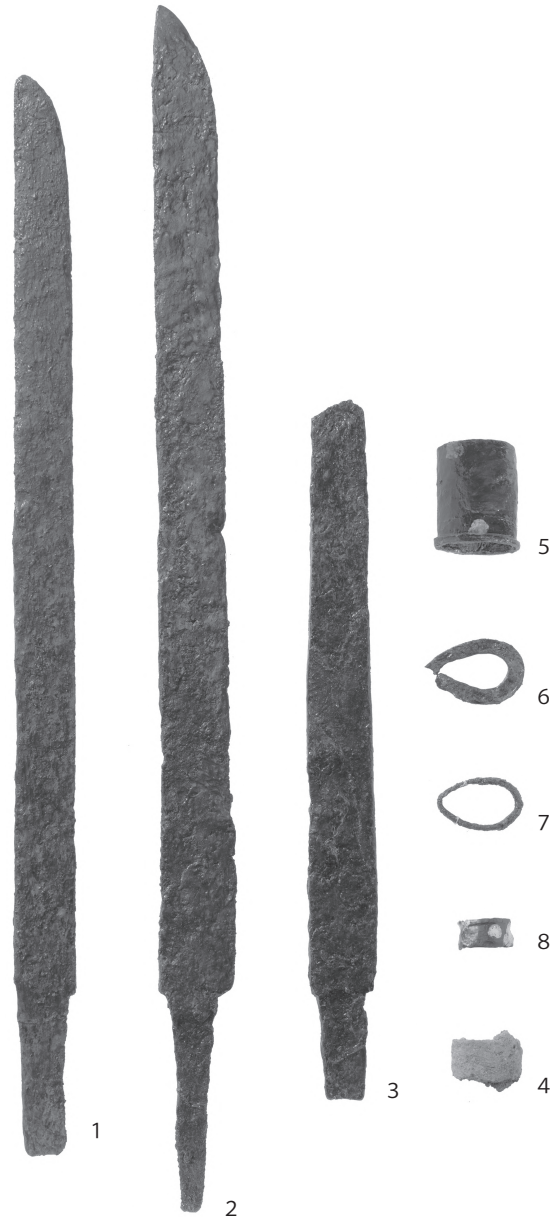


写真6 太田森2号墳出土鉄刀 (S=1/3)  
(番号は図3に対応)

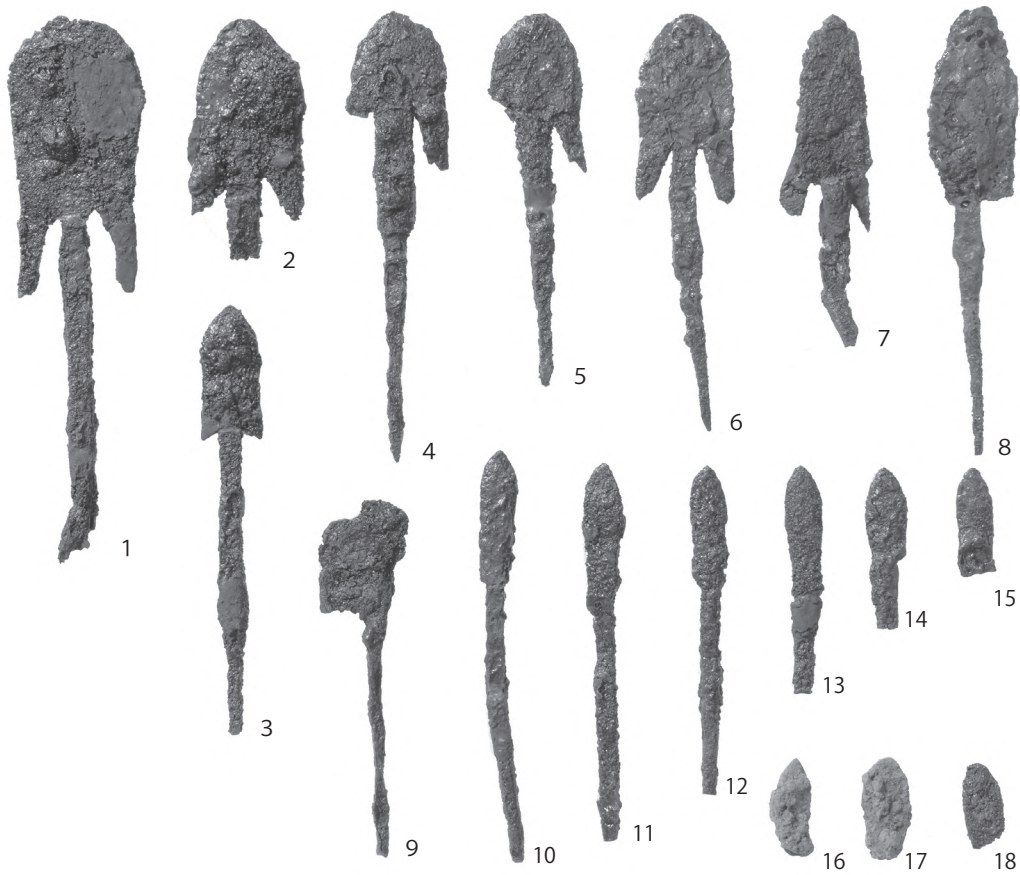


写真7 太田森2号墳出土鉄鏃 (S=1/2) (番号は図4に対応)

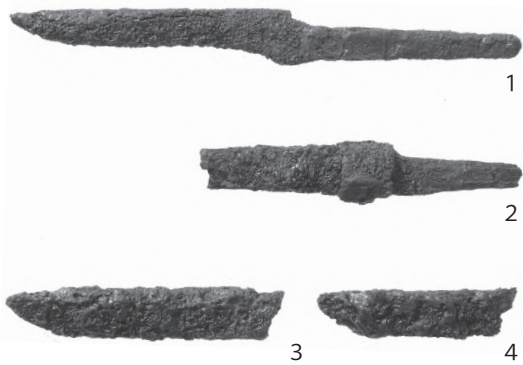


写真8 太田森2号墳出土刀子 (S=1/2)  
(番号は図7に対応)

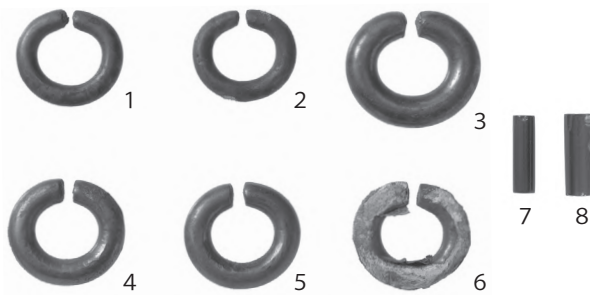


写真10 太田森2号墳出土装飾品 (S=1/2)  
(1~6は図10に対応、7~8は図11の1~2に対応)

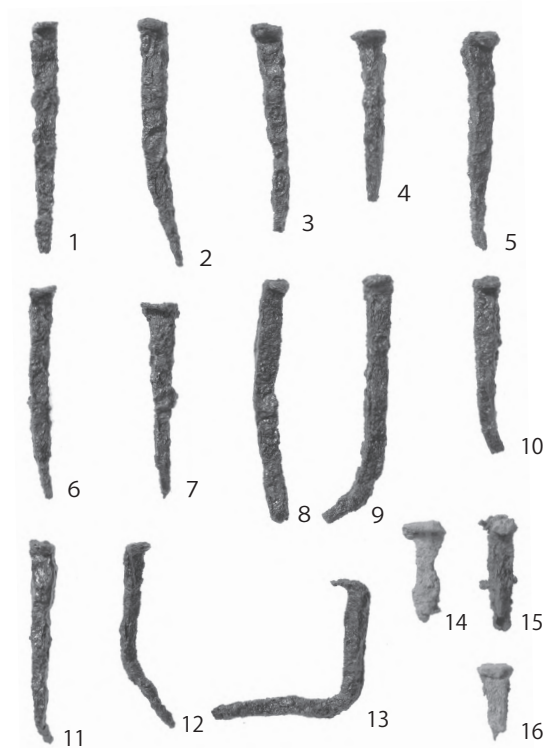


写真9 太田森2号墳出土鉄釘 (S=1/2)  
(番号は図9に対応)



写真11 太田森2号墳出馬具(1) (S=1/3)  
(番号は図5と対応)



写真12 太田森2号墳出馬具(2) (S=1/3) (番号は図6と対応)